



筑紫女学園大学リポジット

The Report of the Lecture on "Promoting Academia-Museum Cooperation" (Tatsufumi KINOSHITA)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 真也, MORITA, Shinya メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/411

【学内研究会】

大学と博物館の連携を求めて

(木 下 達 文)

九博連携準備委員会

森 田 真 也

The Report of the Lecture on “Promoting Academia-Museum Cooperation”

(Tatsufumi KINOSHITA)

Committee to Prepare Cooperation with Kyushu National Museum

Shinya MORITA

はじめに

九博連携準備委員会は、これまで九州国立博物館、さらには地域博物館と大学の連携を模索して活動してきた。本稿は、2007年11月7日（水）に行なわれた九博連携準備委員会主催の研究会「大学と博物館の連携を求めて」の記録である。この研究会においては、これまでの同委員会の活動を総括するとともに、木下達文先生（京都橘大学文化政策学部准教授）をお招きして基調発表をしていただいた。木下先生の御発表では、主に京都橘大学と京都国立博物館、地域博物館の連携の事例が提示され、大学、博物館、地域が結びつく上でのポイントなどの提言がなされた。その後の全体討議では、大学と博物館の連携の可能性と課題について活発な意見交換がなされた。

大学と博物館、大学と地域、地域と博物館の連携は魅力的な可能性を持つものだが、課題も少なくない。そのため、本研究会の内容を記録として残し、今後の大学と博物館と地域の連携に活かしていきたい。

【プログラム】

日 時：2007年11月7日（水）17：15～19：00

場 所：飛翔会館3階会議室

主 催：九博連携準備委員会

- 1 司会挨拶：時里奉明
- 2 経過説明 — 筑紫女学園大学と博物館の連携活動報告 — ：田村史子
- 3 基調発表「大学と博物館の連携を求めて」：木下達文
- 4 全体討議 — 連携の可能性と課題 — ：参加者全員

【参加者】

講 師：木下達文（京都橋大学文化政策学部准教授）

委員会：中川正法（文学部人間福祉学科教授 文学部長 九博連携準備委員会委員長）

天津忠彦（文学部アジア文化学科教授 委員）

田村史子（文学部アジア文化学科准教授 委員）

時里奉明（文学部日本語・日本文学科准教授 委員）

森田真也（文学部日本語・日本文学科准教授 委員）

緒方知美（文学部アジア文化学科講師 委員）

教 員：大森幹之（文学部英語メディア学科講師）

職 員：原恵子（生涯学習課課長補佐）

櫻井美栄（生涯学習課）

学外参加者：永井真佐美（九州国立博物館交流課主任研究員）

深田重實（九州国立博物館を愛する会）

【研究会】

1 司会挨拶

時里 筑紫女学園大学日本語・日本文学科の時里奉明と申します。専攻は日本近代史になります。もう10年近く前になりますが、本学に就職したときから博物館学芸員課程を担当しております。以前、九州国立博物館を支援する会のボランティア研究部に所属して勉強させていただいた経緯があります。今日はせっかくの機会ですので、ざっくばらんな意見の交換が出来たらと思っていますので、よろしくをお願いします。

最初に、田村史子先生から、本学と九州国立博物館（以下、九博）との連携のこれまでの経過についてお話ししていただきます。

2 経過説明 — 筑紫女学園大学と博物館の連携活動報告 —

博物館と大学の新しい関係を考える協議会の活動

田村 それでは、まずお手元の資料（配布資料「筑紫女学園大学と地域・博物館の連携活動の記録」）をご覧ください。今までの経過を討議の材料として年別にまとめております。

2006年11月のところをみてください。九博連携準備委員会というものが出ています。この委員会が発足して、ちょうど1年になりますが、委員長が中川正法先生で、メンバーは、私、時里先生、考古学がご専門の大津忠彦先生、民俗学がご専門の森田真也先生、美術史がご専門の緒方知美先生によって構成されております。この委員会の成立は、本学で大学と博物館との連携というのを一応正式なプロジェクトとして認知されたという、エポックメイキングな出来事となりました。

九州国立博物館がオープンする前の2005年の7月に、本学で「博物館と大学の新しい関係を目指して」というシンポジウムを開催しました（田村史子・時里奉明「シンポジウム ようこそ！九州国立博物館[開館] — 博物館と大学の新しい関係を目指して —」『論叢』第17号、2006年）。この時点では、まだ委員会というものがありませんでしたので、先ほどと同じ5人が、博物館と大学の新しい関係を考える協議会という任意団体を立ち上げ、シンポジウムの企画運営の実現にあたりました。シンポジウムには、350人くらいの地域の方も含めて多くの人々に来ていただきました。

当日は、三輪嘉六館長が「新しい世紀の生きている博物館」というタイトルで、九博が出来ました経緯と特徴、さらには今後の博物館活動の「夢」を語ってくださいました。そして、私がガムランの実演講師となりまして、インドネシア国立芸術大学からサプトノ氏という演奏家をお招きして、大学のガムラン部の学生たちと「アジア青銅楽器の響き」ということで、レクチャー・コンサートをいたしました。そして、シンポジウムを行ないました。司会は森弘子さんという、太宰府の歴史、民俗学の研究者で、広く市民活動を進めてこられ、現在は太宰府発見塾の塾長をしていらっしゃる方をお願いしました。そして、九博の側からは当時、学芸部企画課の課長補佐の三木美裕さん。それから展示課長の赤司善彦さん。福岡女子短期大学の学芸員課程を担当しております中島達也（故人）さん。時里先生と私がパネラーとなりました。

その後、博物館と大学の新しい関係を考える協議会の活動としましては、2006年の11月9日に、九博の本田光子さんに講師をお願いして公開講座をしました。この公開講座では、80人ほど学生が集まりました。博物館の全体的なことだけでなく、実際に彼女の研究テーマを中心に「赤色に見る古代人の思いと現代人の心」についてお話していただきました。

九博連携準備委員会の活動

田村 博物館と大学の新しい関係を考える協議会の活動は、その後、九博連携準備委員会へ移行いたしました。今年（2007年）、大きな出来ごととしましては、キャンパスメンバーズへの加入があげられます。去年、九博と大学のあいだの意見の交換があったのち、今年の4月にキャンパスメンバーズという制度を博物館が開始しました。この制度では、本学の学生であれば学生証をみせるだけで常設展示をみることが出来ます。また、その他の優遇が受けられます。

それから、今年度の前期の公開講座としては、平中英二副館長に「九博の目指すもの — アジア的視点から文化交流を考える —」というタイトルでお話していただきました。このときには近隣の地域方、学生も含めて120～130人くらい集まりました。

そして、本日の木下達文先生の公開講座「博物館と地域連携 ― ミュージアムの未来像を求めて ―」、本研究会に備えまして、10月18日に学内の任意の教職員によります「博物館と大学の連携活動に関する意見交換会」を持ちました。

博物館学芸員課程の実習

時里 活動の補足ですが、九博には、博物館学芸員課程の4年生の学生を、「博物館実習」の学外実習ということで受け入れていただいております。また、「博物館実習」の学内での講義においても、バックヤード・ツアーなどを利用させていただいております。また、学芸員資格を取った卒業生が、案内スタッフとして、九博のフロアで数人が働いております。

間接的ですがけれども、付け加えて言うと、九博に「TACT（文化財保存活用支援センター）」というNPOがあります。文化財の清掃やクリーニングをするNPOです。その代表の森田レイ子さんという方から要請があって、本学の学芸員課程を中心とした学生を派遣しております。

個々の教員の活動

田村 個別の教員の活動もあります。アジア文化学科1年生の「基礎演習」という講義では、必ず全員、キャンパスメンバーズの制度を利用して九博にいらしております。また、各教員がこの制度をそれぞれの講義で活用しております。私は「ミュージアム体験実習」という講義を2005年から始めて3年目になります。このような講義への利用は、アジア文化学科だけではなくて、本学の特徴として特化していきたいと考えています。

なお、このような活動以前から私個人は直接、九博とのかかわりを持っていました。2000年の時点から、常設展示専門プロジェクトチーム委員として準備にかかりました。そして、主に教育普及プロジェクトについて関係しました。2003年ころから、九博との連携協力プロジェクトの立ち上げやその利用の構想を提案してきております。そして、去年の4月から、九州国立博物館交流課主任研究員の永井真佐美さんの協力のもと、ガムランワークショップを行なっています。これには、指導補助員として本学のガムラン部の学生も参加しています。ワークショップ「五感で知る、アジア青銅楽器の魅力」では、九博にいらっしゃる方たちに、博物館が持っている資料を使って、実際に演奏を体験してもらっています。そして、私の側としては、「アジア音楽演習」という講義のなかで学生を育てて、その学生が実際に公共の場で、教えるという体験をしてもらうということをしております。去年は8回開催しております。毎回20～50人くらいの人に来ていただいております。

ボランティアの人、子どもたちが楽器に触るなかで、インドネシアのことをもっと知りたいという声が出てきました。インドネシア連続講座「ジャワの文化を知ろう」を去年の12月から今年の3月にわたって5回開催しました。音楽のこと、舞踊のこと、そしてバティックという染色、ジャワ更紗の紹介をしました。それから、ワヤン・クリという影絵芝居、その話と実演を5回ほどしました。

このとき、ミュージアムホールがいっぱいだったため、エントランスホールで開催した回がありました。そうしたら子どもたちがずっと魅かれるように来て、2時間動かないということがあ

りました。最後にかなり重度の障害を持った車いすの方が入ってきて、一緒に演奏したのですが、しだいに和んできて、忘れられない体験になりました。去年は1回、アルコール依存症の自立を促進する施設の方にも来てもらいました。

なお、先日、1月3日には、太宰府市周辺にある8つの大学がキャンパスネットワークというものをつくっていますが、「だざいふキャンパス祭 in Kyuhaku」というのを行ないました。これには本学も入っているのですが、九博との共催でガムラン部他の学生たちも参加させていただきました。

「本願展」の開催

田村 あと重要なものは2007年、秋の特別展「本願寺展 ― 親鸞と仏教伝来の道 ―」の開催があります。この「本願寺展」は、筑紫女学園大学と西日本新聞社との共催で、約2万人の入場者がありまして大盛況でした。これは、すでに述べました、2005年のシンポジウムでの三輪館長の基調講演のなかに、ぜひ大学が特別展示のアイデアを出してくださいというのがあったのが、一つのきっかけにもなっております。それを受けて、当時の高石史人学長が提案を投げかけたことにはじまります。

現在の連携活動の課題

田村 実は博物館の側から学生を出してほしいという要請があります。しかし、まだ体系的に本学にそのような要請に対応出来るようなシステムがない状態だということも事実です。現段階では、博物館との関係は教員一人を通じたものです。本学の場合は、それぞれの専門の領域、例えばアジア文化学科でしたら、中国語や韓国語を勉強している学生がいます。それから人間福祉学科や発達臨床心理学科では、それぞれの専門がすぐに生かせる学生もいると思います。ただし、そのような検証や提案はまだ不十分です。

私としてしましては、大学全体がうまく機能して、総合的に博物館との関係を構築していく上でのシステムが必要になってきているという意見を持っております。つまり、職員の方も含めた学内のシステムづくりというのが必要であると考えております。これには、博物館側からの要請に答えること、地域との連携、何より大学教育の活性化ということも含まれます。このような流れを前提としまして、今日はぜひ、木下先生、他多くのみなさんから、ご意見、ご批判などをいただきたいと思っております。

3 基調発表「大学と博物館の連携を求めて」：木下達文

講師紹介

時里 それでは基調発表にうつります。まず講師の木下達文先生のご紹介をしておきたいと思っております。木下先生は、京都橘大学文化政策学部現代マネジメント学科に所属されている方です。博物館学、展示学をご研究されています。広義の文化ボランティア、博物館ボランティア、ミュージアムマネジメントの研究の分野でもご活躍をされています。

なお、私も学芸員課程で博物館関連の講義を担当しておりますけれども、本来は歴史学が専門

です。私のようなケースは稀なものではなく、日本全国を見てみると、歴史学、考古学、民俗学などを専門とする教員が博物館関連の講義も教えているという体制が大半です。そういうなかで、木下先生は、博物館というものを真正面から研究している、数少ない研究者だと私は思っています。

もう一つは、実践的な活動です。今年の夏に地震にみまわれた新潟県柏崎に、文化ボランティアにいかれたとお聞きしています。大変な苦労があったろうと思いますが、そういった活動というものを通して、文化ボランティアというものにかかわっている、実践的な研究者であろうとは思っています。

今回の研究会の趣旨としては、九博が誕生して2年となり、すぐ近くに本学があります。太宰府市近辺でいうと8つの大学があります。しかし、どちらも「知のインフラ」とでも言いますが、要するに、「知」というのを蓄積し、連携して活用していくような仕組みがまだ出来ていないと思います。

今回、九博側から永井さん、「九州国立博物館を愛する会」のボランティアの立場から深田重實さん、本学からは教職員を呼んで研究会が出来たのは、実は画期的なことだろうと思います。そこで今日は、大学、博物館、地域との連携の可能性、それを実現する上での課題について、考えてみたいと思います。どのような連携が可能なのか。実際難しいことも多いのですが、その実現に向けて木下先生を交えて、有意義な意見交換が出来ればというのが、本日の目指すところです。

京都橋大学と京都国立博物館の連携 ― 博物館実習を中心として ―

木下 京都橋大学文化政策学部現代マネジメント学科の木下達文と申します。

今日は、大学と博物館の連携ということで、いくつかの視点や実践を提示しまして、その可能性と課題についてお話をしていきたいと思います。最初に京都橋大学で行なっていることについて、つぎに私個人として行なっていることについてお話をします。

京都市の場合は、市内に約50の大学があります。ただし、そのなかで京都国立博物館（以下、京博）ときちんとした連携を取っているのは、京都橋大学だけです。それはなぜかといいますと、京都橋大学には、文化財学科と歴史学科があります。そこに京博から教員として来られた方がおられまして、当初から人的ネットワークが非常に強かったという事情があります。しかも、文化財学科の学生のほとんどが学芸員資格を取っているという経緯があります。少し前までは年間120人くらいの学生が資格を取っておりました。私は6年前に当時担当だった千地万造先生のあとを引き継いだかたちで、博物館学芸員課程の担当としてこの大学に赴任しました。各専門分野の先生方が今でもたくさんいらっしゃいますので、専門研究と同時に、私のマネジメント研究をプラスしたかたちで学生の指導をしております。

京博との関係を言いますと、約10年になりますが、学芸員課程のかなりの人数の学生を、受け入れていただいております。京都橋大学ではほとんど非常勤の教員を依頼せずに、専任の教員が実習も含めて指導しております。そのため、博物館側から評価が高かったということがあります。

そのため、京博側から、実験的に少し提携をしてみないかという提案がありました。当時、私はいなかったのですが、京都橘大学としても博物館と提携出来るのは非常にいいことではないかということで、いろいろな方法を模索しながら、実習のなかに取り込むことを試みました。当初は企画展示のなかで、学生がその作品を解説するという実習を行ないました。京博の場合、企画展示・特別展示と、常設展示がありますが、企画展示と特別展示の大きな法的違いは何もありません。最初の年は、一時的な展示会のときに学生を実習として入れていたのですが、難しい面もありまして、次の年から常設展示に切り替えました。といたしますのは、やはり特別展示ということになりますと、学芸員がその準備も並行しながら行なわないといけないわけです。内容も作品も十分決まらないままで説明は出来ないということもありまして、実習としては常設展示のほうがいいのではないかということになりました。

京博では、今年の秋に狩野永徳の展示をしています。特別展覧会「狩野永徳」に来たお客さんを常設展示にアナウンスで呼び出して、曜日と時間を決めて木曜日と金曜日に、午後3回、1時、2時半、4時というかたちで、約40分、展示品の解説をしています。場所としては、考古、工芸、仏像と大きく三つの分野に区切って、それぞれ一人の学生がお客さんに対応しています。そして、他の学生は呼び込みをしながら、うしろのほうでそれぞれの実習生を見ているというかたちとなります。期間は4週間です。

それまで前期中に基本的な実習を行ないます。配布しました資料（配布資料「京都橘大学博物館実習シラバス」）で言いますと、上段の実習が、京博と連携をして行なっているプログラムです。京博以外の学生が実習するプログラムもあります。これらは同じ「実習」という位置付けです。これは4回生（4年生）になってからしか取れない実習に位置付けていますけれども、A、B、Cというかたちで分けています。だいたい京博実習の学生は20人（正確に言うと18人）です。それに対して、それ以外の学生が70~80人いますので、そちらのクラスは二つに分けて、私が同じ授業をしているというかたちです。京博での「実習」のほうは、ボランティア解説ということを中心にしていますので、それ以外の資料の扱いは3回生（3年生）のときに指導します。

京博の学芸員の方にも毎年、正式に契約を結び非常勤講師として講義のお願いをしています。前期中は1回から15回まで講義がありますが、これは学芸員の方の都合に合わせて、博物館で授業を行なう場合もあれば、大学まで来ていただいて授業を行なう場合もあります。それは先方の担当者の都合に合わせて全部、毎年変えていきます。学芸員の方にとってみれば、大学でこういう実習を行なうことはキャリアアップにもなるわけです。

京博というのは、日本の国立博物館のなかでも、専用のボランティア組織がありません。そのため、京博としても、ボランティア実績のアピールになります。そういった先方の博物館と学芸員の方の思惑と、大学の側からすると、国立博物館で学芸員実習が出来るというメリットがあります。

なお、京博での解説に入る前に事前の講義があります。内容的には最初のオリエンテーションから、基本的な資料の取り扱いや、写真撮影、印刷物作成などの指導をしていただきます。5回

目以降は、それぞれの展示室の特性について解説があります。そして、実際、博物館に行って予行練習を前週にしておきます。京博の場合は、だいたい秋の展覧会に合わせて実習を行ないますので、通常10月の後半から11月の中旬にかけてとなります。ただこの間どうしても学生が、授業のない期間がありますので、1回、2回、後期が始まってから、予行練習をもう一度して、実際の解説に入っていくというプロセスを取っています。終了後も反省会を必ずして報告書を作成します。

これまで、10年程このような学生の解説の実習をしてきましたので、博物館、大学ともこのプログラムについてわかる方が非常に増えてきました。そのため、担当以外の方からのサポートもありますので、非常にスムーズに実習を進めることができています。

ただし、来年度から、京博は常設展示のリニューアルに入ることが予想されます（現在、平常展示館建て替え工事中）。一度リニューアルに入ると、5年くらいは閉鎖されるだろうと予測されます。その間どうするのかということが、一番今われわれのなかで大きな問題です。東京国立博物館（以下、東博）、奈良国立博物館の動向もありまして、不確定要素もあるのですが、京都橘大学としては、このような京博との関係をうまく発展させたいと思っています。

実は、大学と国立博物館の連携としては、京都橘大学としてはそれ以上のことはしていません。ただし、このような連携在り方というのは、全国の国立博物館のなかでもないかと思えます。今後、筑紫女学園大学と博物館の連携として、特に博物館実習としてこのようなかかわりかたも可能ではないかと考えます。

永井 お話の途中ですが、質問をしていいですか。私も実は九博で学芸員実習の担当をしています。九博の場合は、まだ完成して2年ですので、昨年度から実習の募集をしました。前期、後期10人くらい、合計20人程度ということで、広く全国から希望を募りました。学芸員は専属ではなくて、いろいろな実習プログラムというより、半分が「あじっば」における来館者対応です。また、博物館全体の活動を知ってもらうということで、学芸員以外の者も講師になって、講座、演習をしております。そこで問題になってくるのが、先の受け入れ定員です。キャンパスメンバーズの大学を優遇していますが、それ以外の大学もたくさんあるわけですから、特定の大学のみから取れないという事情があります。そのため、こちらの筑紫女学園大学からも、前期、後期と2人しか、受け入れられませんでした。そこで、京博の場合は、京都橘大学のみ、学芸員実習を受け入れるというかたちを取っていらっしゃるのでしょうか。

木下 以前、京博でも解説ボランティアではなくて、いわゆる一般の博物館実習としての受け入れをしていました。ところが、独立行政法人になってから、その受け入れをやめてしまったということがあります。全国大学博物館学講座協議会西日本部会としても、教員の組織としても、継続の要望書を出したのですが、難しいところもあるようです。実習の受け入れについては、それぞれの博物館に委ねられています。制限付きとはいえ、九博が実習の受け入れをしていることは、非常に素晴らしいことだと思います。国立博物館というネームバリューだけでも、多数の応募があると思います。そういう意味での国立博物館の博物館としての教育をどう考えるのか、そ

れも大学生の教育をどう考えるのかということを問うていく必要があります。実習が不可能だとしてもインターンという制度を、国立国際美術館や国立西洋美術館、東博でも始めています。国立博物館としての教育の在り方、責任ということも考える必要があると思います。これらはまさに博物館教育の課題だと思います。

永井 現状として、九博の学芸員実習は10日間という限られた日程のなかで、博物館の活動を理解してもらうというような広報的な意味合いのほうが強いといえます。学芸員の方は確かに協力的ですが、博物館の側としての実習のとらえかたにはやはりまだ課題が残ります。京博の事例から新たな方法の模索も必要だと感じました。

大学教員個人としての取り組み ― コーディネーターとして ―

木下 私はこの京博とのネットワークというのは、一つの限られた関係性だと思っており、本当は個人的にはもっと広げたいと思っています。

京博とは別に、京都には京都国立近代美術館というものがあります。今から4年前に、そこでワコールと提携をして、「COLORS ファッションと色彩」という展覧会をしました。そのときには、VICTOR&ROLF を連れてきて、ゲスト・キュレーターというかたちで展覧会をしました。その教育普及の活動で、京都橘大学に協力の要請が参りました。その際、ファッションショーの手伝いや会場の設営を手伝いました。それからフロアマネジメント、ワークショップの開催など、私のほうでメニューをつくりました。さらに広報資料の作成、配布などを実習の一環として学生にしてもらいました。このとき、教務課と相談しまして、年度をまたがったかたちでしたが、単位といたしました。

あとは私個人の自主的な活動で地域博物館その他で連携を進めています。多くの事例から、一つお話をいたします。琵琶湖博物館に「はしかけ」という制度があるのは、いろんな方が知っているかと思います。琵琶湖博物館の場合は、ボランティア制度はつくらないという姿勢で、同様の内容を「はしかけ」という制度で補っております。来館者と施設とをうまく懸け橋をする。このような意味をあらわす琵琶湖地方の言葉として、「はしかけ」という言葉があるそうなのですが、これはうまく博物館を使ったださるという人を育てることを目的とした制度です。そのため、博物館側からこれをやってくださいということは一切言わないのです。博物館で何かやりたいことがあれば、県民のみなさんからどんどん言ってきてくださいということで、今11の組織があります。例えばある組織は、「うおの会」といいまして、淡水魚を考える会です。淡水魚を考えながら、魚と琵琶湖に親しむ会なのですが、それだけで約100人のボランティアのかたがいらっしゃいます。それも大人から小学生までおります。その「うおの会」の小学生は、琵琶湖の淡水魚の名前をすべて回答出来るといいます。あと、今年の夏の企画としてコイの展覧会をしました。私も自然誌はよくわからないのですが、コイは歯があるそうです。コイの歯のことを咽頭歯と言うそうです。それで、「咽頭歯の会」というものがあります。これは何をするかと言いますと、コイの場合は、咽頭歯の形で固有種を決めていくそうです。そのため、咽頭歯

の形というのは、種を判断するために非常に大事な材料です。そのレプリカづくりというのが結構大変だそうです。それを手伝いたいという人が出てきまして、メンバーが1人なのですが、「咽頭歯の会」という一つの会となっております。これはサポーターとしてやりたいというものを出来るだけ尊重するという事です。サポートの会と博物館がお互い協力しながら、うまく利用しあっていくことが目的です。そのため、あえてボランティアという言葉は使わないことになっています。

そのなかで、京都橘大学の学生が、体験活動、ワークショップを博物館でやってみたいという提案を出してきました。他の博物館では難しいこともあり、琵琶湖博物館に相談しました。そして、担当者といろいろ調整しながら実現することが出来ました。当時はちょうど学校が週5日制になる、つまり土曜日が休みなる、また「総合学習」がはじまるちょうどそのころの時期でした。子どもたちの土曜日のプログラムを博物館でつくりたいのだけれども、スタッフが足りないので、少し協力してくれないかということで、京都橘大学の学生を送り込みました。場所が結構離れているのですが、学生の意識が高かったのでしょう。月に何度も博物館に行って、担当の学芸員と調整しながら、プログラムをお互いにやりとりしてつくっていきました。当初は学生が主体となり、学芸員がそれをサポートするというかたちで行なっていました。そのうち、その活動がだんだんと大きくなりまして、学生だけではなくて、来たお客さんもやりたいということになりました。自分たちもサポーターになりたいという人が出てきたわけです。いろいろな人たちが参加をして、土曜日に体験活動を提供するワークショップをやるようになっていきます。学生自身もそのような現場に出たことによって、水を得た魚のように活動を行ない始めました。博物館にとってみれば、そういうプログラムを自分たちの力以外で大きく出来るというメリットが出てきました。そのため、4年くらいたったときに、企画自体を全部学生に依頼することもありました。このような活動記録を学生がまとめて、日本博物館協会の雑誌に出しましたら、先日「棚橋賞」をいただきました。

今は、琵琶湖博物館にとどまらず活動を広げております。例えば近くに佐川ミュージアム（佐川美術館）という、佐川急便が持っている美術館がありますが、そこでも活動を開始しています。琵琶湖博物館と佐川ミュージアムが協力して、他の博物館を含むネットワークのプログラムを試みています。今後は、それを広げて滋賀県中の美術館、博物館、それから文化ホールや文化会館というのを全部つなぐようなネットワークを構想しています。そして、それぞれに出来るワークショップがあるはずですから、お互いどういうものがあるか全部出してみてくださいというプログラムを今展開しています。

なお、美術館に来られない人もたくさんいます。そこで、われわれも今年から養護（特別支援）学校などに行く活動もしています。学校の先生が、「あの子どもたちが、あんな反応をした」と言って、ものすごく興奮してくれました。その他にも反応がありまして、美術教室でもそれまであまりいい成績をおさめてなかった学校だったようですが、その後、全国の美術大会で優勝校になりました。それで県も動き始めて、ボランティアセンターを去年の7月に立ち上げました。学

生が行なうプログラムというのが、非常に効果があるというのが見えてきました。特に、子どもたちが子どもたちに対するとき、大人がやるよりも子どもがやるほうが、非常に効果があるというのがわかってきています。それはなぜかと言うと、大人だと「あれをやってはいけない、これをやってはいけない」と言って、制止したり、上から言われたら「これをやれ」ということで、子どもは言うことを聞かないで反発し始めることがあるのです。でも、学生は子どもにすごく感性が近いので、学生が子どもの感性をうまく引き出して、育ててあげるといったことの効果があります。2年前に当時の文化庁長官の河合隼雄さんも、このプログラムに参加して、「私が総合学習と言っていたのは、これなんだ」と言ってくれました。滋賀県ではそういった、本当の意味での総合学習を育てていこうという動きが今非常に高くなっています。そして、われわれのこのような企画そのものを、美術や総合学習だけではなくて、いろいろな教科に落とし込んでいくような仕組みを今これから考えようとしています。

大学と博物館と地域の連携に必要なこと

木下 大学と博物館と地域連携のために必要なことがあります。2点だけ申しますけれども、その一つはやはり「意識」です。「つながろう」という意識を本気で持っていないと、本当につながりません。そのため、私は今回のような研究会や会議は非常に大事だと思っています。きちっと対面して、納得いくまで話をしないと、本当につながるところまでなかなかいかないと思います。たとえ表面的につながっていても、本当に連携にはなりません。

さらにもう一つ言うと、私が重要視しているのは、教育の問題も含め、その大人に対して、あるいはネットワーク先に対して、「信頼」を持てるようなところまでいっているのかということです。そういった信頼関係を構築するというのが、非常に難しいのです。重要なのはつながる意識です。そして、それを持続して信頼を得ることだと思います。

特に自治体の場合は異動が激しいため、信頼関係が構築出来て、組織もうまくいったけれども、担当者が変わってしまったところで、全部がうまくいかなくなるという事例も嫌というほど見えています。そのため、そうならないための意識の持続性ということ、組織論でやっていかなければいけないと思います。

特に大学の教員は、スタンドアロンで動いている方が非常に多いかと思っています。最近も大学も地域との連携活動をしていくということで動いていますが、その実現、さらには特色を出すことが難しい面もあります。地域と連携をしていくためには、土日も出ていかないといけないこともあります。やはり、出ていかなかったら、「かたちだけか」と、みんな背を向けてしまいます。そういうことに対して真摯に取り組めるような意識を持っていないと、必ずどこかでつまづいてしまうことになります。何が一番困るかと言うと、そういうかたちで育てられた人たちが、みんな路頭に迷うのです。そのため、「裏切ってはいけない」、そういう覚悟を持って対応しないといけないと思います。このようなことは誰かがしないといけない仕事です。それ自身がコーディネーターの仕事だと私は思います。そのため、高度なコーディネート力を持つ人材を育成していかない限り、やはり限界が見えてきます。逆に言うと、高度なコーディネート力を持つと、有益な活

動が展開出来ます。もしかしたら、自治体以上の活動が出来るということもあります。

このような活動に関わるのはいろいろな人たちがいます。仕事を引退された方もたくさんいます。これから博物館から引退していく方もたくさんおられます。大学を引退された方もたくさんいらっしゃいます。実はそういう人たちに限って、自分の活躍の場を求めているわけですが、今はそういうところが少ないといえます。学生もまたいろいろなところで活動したいと思っています。そういう場をつくってあげることが大切です。ただし、それぞれの意識は1人1人、100人いれば100人違うので、その人たちの話を真摯に聞いて、どこの事業と組み合わせるのかということ、きちっと考えられる人、そういう人が今日本のなかで求められているのではないかと思います。県や国のレベルでも推進してほしいということで、文化庁にもお願いしていますし、県の文化振興関係の人にも話をしています。そしてうまく実現出来れば、教育の現場でも、ものすごく大きな効果を生みはじめると思います。NPOの人たちも自分たちの活躍の場を設けていきたいと考えています。何かをしたい、言いたいという人に活動の場所を与えてあげると365日働きます。それがコーディネーターの仕事です。

今年3年目に入りますが、現在、プログラムを開発するイベント、横のつながりをつくる体験プログラムという授業も展開しています。ここではそれぞれのプログラムの案を出し合う、あるいはサポーターがプログラムを開発していく、それを評価するということまで進めています。またいろいろなところでそういう連携活動が進んでいったらいいと思っています。

最後に、筑紫女学園大学と九博とのかわり方を考えてみましょう。それはやはり太宰府という一つの空間にあるということが大きいと思います。本当に大学と博物館がこんなに近い関係というところも珍しいのではないかと思います。これはやはり非常に大きなメリット、有利な点です。現状として、博物館実習が2人というのは、非常に寂しいと思います。実習は実習として、全国に開かなくてはいけないという問題があると思いますが、いろいろな授業での活用、例えば、収集保管だとか管理、調査、研究、展示、教育普及関係など博物館の持つ要素を活かしていく可能性があると思います。

そういうなかで、例えば、今度こういうところに調査に行くから来てみないかとか、あるいはこういうプログラムをするので手伝ってみないかという様々な要望をお互いが出してみることが必要です。その際、うまいかたちでどこかにそのセクションをつくっていただいて、調整をすることが必要です。まさに双方のコーディネーターをきちっと立てていきながら、出来ることと出来ないことを明確にしていくわけです。

それから、太宰府周辺地域には8つの大学があるとおっしゃっていたと思うのですが、京都にも約50の大学があって、滋賀県内にもたくさんの大学があります。しかし、意外と大学は動いてくれないことが多いかと思います。そのため、大学の窓口を開いていくということも働きかけています。私は地域の人たちが、地域の空間を開いていくということが本来だと思っておりますので、地域の大学が博物館と連携していくことが大切です。

日本国内でもボランティア意識が1995年以降から少しずつ芽生えています。しかし、時間がか

かるというところがあります。ただし、積極的に意識を持って開いていくと、少しずつつながっていきますので、そのような人を見つけていくということが大事になると思っています。各大学にも、そのような意識を持っていたり、専門的知識や経験を持った教員のかたがいらっしゃると思います。

また、博物館側も大学とどのようなネットワークを組んでいくか、筑紫女学園大学の学生が出来ることもあれば、別の大学の学生が出来ることもあるかと思います。筑紫女学園大学だけでなく、複数の大学と博物館のネットワークの確立も必要だと思います。

4 全体討議 — 連携の可能性と課題 —

田村 本学の側の組織の問題もありますが、九博と連携を組んでいく上でネックになっていることがあります。それはこの委員会にちょうど対応するものが博物館側にないということがあります。そのため個々のケースでつながっているのが現状です。九博側とも何度か話し合いはしたのですが、国立博物館としては特定の大学と、特定の関係を結ぶことはなかなか難しいということのようです。今、どうやってその道を開くかというところで、何かいい方法はないかと考えております。

木下 京都橘大学のように特定のかたちを決める方法もあるのですが、例えば大学連合のようなかたちにして、その位置付けをきちっと決めてくというのもあるかと思います。筑紫女学園大学としては距離的にも近いわけですから、多くの学生が主体的に関係する可能性を持っています。

永井 九博には、ミュージアムティーチャーというものが、私ともう1人、小学校の教員がいます。私はもともと高校の教員ですから、担当としては高校、および大学との連携が仕事です。しかし、実情としましては、「あじっば」の運営が主体になっています。活動としては、大学の学芸員実習、高校生のジュニア学芸員という体験をしてもらっています。もう1人は、300人いるボランティアを束ねるコーディネーターを担当しています。本来のミュージアムティーチャーとしての仕事、新たな博物館と大学をつなぐコーディネートまでなかなか手が回らない状況です。学芸員の仕事をしている人のなかにも、そういうことをやりたいと思っている人はおりますが、特別展示の準備などもあり、多忙を極めております。また、国と県が協力して運営する初めての国立博物館ということで、いろいろなレベルでの課題がまだ少なくありません。

田村 私の場合は、九博と長い付き合いがありまして、特にガムランワークショップは、ある意味ですごく成功した例だと思っています。しかし、これまでのケースでは、博物館から、大学の側からプログラムをつくって提示してくださいという場合が多かったように思います。しかし、私としては、点でと線ではなくもっと大学と博物館というものが、面につながっていくようなことをイメージしています。それには、しっかりした組織づくりが必要だと考えています。

時里 その場合、京都国立博物館と京都橘大学とでは、問題がなかったのでしょうか。すんなりお互いのコーディネーターというものがうまくいったのでしょうか。また、具体的にどのような活動でつながっていったのでしょうか。

木下 いえ、最初に制度をつくっていたら、いつまでたっても動かないだろうと思いました。現在ではある意味、制度として成り立っているのですが、私が個人として動いている例が多いといえます。博物館のなかにもさまざまな思考の人たちがいます。そのなかでやはり「つながりたい」と思っている人が必ずあります。そういう人と何が出来るのかということで、館の事業として位置付けているところがあります。なかには、館とは直接のかかわりを持たずに、その人がボランティアとして動いている場合もあります。それは施設によってケースバイケースです。学生はいろいろなことをしてみたいと考えています。そのため、最初から制度として決められると、選択肢がないという話になってしまいます。

九博と筑紫女学園大学が出来る限界というのがおそらくあると思います。それで出来ないことは、別に九博とだけではなくて、ほかの地域博物館や施設と連携を取ったらいいいわけです。それは学生が主体となって「つなげていくもの」だと思います。職員同士が繋がらない場合もありますが、ボランティア自身が博物館同士をつなげている例もあります。制度や組織の整備を待っていても何も動かないこともあります。

田村 学生が動くということは、当然大学がかかわっていくわけです。そのときに、やはり職員の人たちがどうかかわっていくかというのが、すごく大事なことだと思います。京都橘大学の場合は、学生が外に出ていくということに対して、大学のシステムとしてはどのようにとらえているのでしょうか。

木下 京都橘大学の場合は、特に学生の活動として、部分的に位置付けられているものもありますが、まだボランティア活動が十分課外活動として位置付けられてはいません。現代段階では、単位認定はしていません。ですから、今、私が考えているのは、ボランティア的な体験については、インターン的な扱いが出来ないだろうかということです。ちょうど今、キャリア教育というのがかなりいわれています。京都橘大学の場合は、教務課と学生支援課というのがあります。学生支援課は、サークル活動の支援だけでなく、就職活動の支援もしています。教務課のほうでは事務的な対応をさせていただき、学生支援課ではインターンをキャリア教育として社会体験というかたちで位置付けています。その場合は10日間に限られてしまうのですが、本当に関係したい人はそれを越えていきます。

永井 質問ですが、先ほど琵琶湖博物館の話が出ましたけれども、そこにかかわった学生というのは、だいたい何人くらいでしょうか。また、学部学科というのは、限られているのでしょうか。

木下 かかわった学生は相当の数がいます。何年かに渡りますが、20人くらいはいると思います。最初からいる学生は、先にいいましたように日本博物館協会の「棚橋賞」をもらいました。今大学を卒業しまして、琵琶湖博物館の研究員になっています。琵琶湖博物館の場合、授業の単位にはなっていません。それは少しかわいそうなので、学生表彰のボランティア版をつくってもらいました。あと、私自身の仕事としては、このような活動を社会的な評価にまで高めていくということをしたいと思っています。

時里 木下先生が琵琶湖博物館にかかわったのは、やはりコーディネートの博物館へ話をしながら送り込むという役割を果たしたということですか。

木下 私は所属が文化政策学部現代マネジメント学科です。本来、文化政策学部の学生を中心にこのような活動をしなればいけないのですが、例えば学芸員資格を取る学生の100人中、文化政策学部の学生はだいたい20人くらいです。あとの80人は、文学部歴史学科と文化財学科です。私の場合は、学部学科を越えて指導しています。

時里 九博と博物館学芸員課程の実習についてお話しさせてください。過去の事になるのですが、本学を「博物館実習」において優遇してもらうように話をすすめていました。

しかし、他の国立博物館との兼ね合いもあるのでしょうか、4月になって担当者が変わったことで、この計画が流れてしまいました。受け入れを決める時期も含めて、考慮いただきたいところですか。

中川 質問をさせていただいていいでしょうか。九州国立博物館を支援する会というのがありますが、九博とボランティア、一般のかたとのかわりというのはどのようになっているのでしょうか。京都橋大学で試みている実習の解説員つまり学生、大学院の学生、そして一般の市民のボランティア、そういったものが一緒になっていくのか、あるいは別々に活動すべきなのでしょうか。また、どのような違いがあるのでしょうか。

深田 九州国立博物館を支援する会のメンバーもボランティアの公募に応募しております。一応、1千人くらいは応募されて、だいたい4人に1人くらいが通っております。比較的新しい人が通っているように思います。

木下 日本は今まではとにかく箱づくりをしてきました。しかし、ボランティアということを考えますと、阪神淡路大震災がものすごく大きな転機だったと思います。自分たちが動かなければ動かないという意識です。本当の意味での市民社会が今動き始めていると思います。

九博というのは、人的な動き、それから寄付金の状況というのが、いままでの国立博物館の設立経緯のなかではトップです。これには地域性もあるかとおもいます。出来れば、そういったいろんな年代の人たちが有機的に活動をするというのが、私の理想です。ただし、いろいろな活動を個人的に展開したり、いろいろな人の話を聞いているなかで思うのは、非常に高度なコーディネート力が必要だということです。人々に活動の場を与える双方の立場でのコーディネーターが必要です。それはなぜかと言うと、少し目を離すと、同じ年代がどうしても固まってしまうのです。それをうまく年齢だとか性別をバランスよく配置していくというのは、政策的にしていけないと、なかなか共通課題が見えてこないということがあります。

もう一つは、博物館側もそうですが、ボランティア側も経験が薄いということがあります。日本ではこういう連携活動の経験が非常に薄いといえます。やはり日本は20年、30年かけていけないといけないのではないのでしょうか。ボランティアも、いつまでボランティアをさせてもらえるかもわからないということがあります。同じ人数をまた入れ替えたとしても、まったく違うことしか出来ないかもしれません。これは、やはり人が行なう行為ですので、そういった組織によっ

てかたちが変わっていく、内容が変わっていくのが、逆にこういう活動の特色なのではないかと思います。ただし、きちんと見る人がいないと、活動がどうしても偏ってくるということが当然あります。逆に言うと、よく見ていると、すごいことが出来るわけです。

そのような活動の広がりの中で一番進んでいるのは、やはり福祉関係の領域、まちづくりの活動です。学生もまたまちづくりの活動に参加してほしいと思います。それから、まちづくりの活動の場合は観光ともかかわってきます。そういう観光ボランティアの在り方にも参加しようと思えば出来ます。かなりの海外の方が来られていますので、国政交流のボランティアも当然考えられます。もうフィールドは目の前にあるわけです。いくつかのメニューをつくることは、学生のうちはなかなか難しいかもしれないですけども、卒業生の人たちがNPOなどそういう組織をつくるかもしれません。私が注目しているのは、そのような市民活動の広がりの中で、博物館が窓口となって連携を深めていくという在り方です。自然史系の博物館などは、そういう取り組みを非常にたくさんやっています。例えば、NPOとうまく連携を取りながら、昆虫の生態の情報などをうまく得ています。そういった市民活動がたくさん数えきれないほど出てきています。そういう活動の情報をきちっと、県などが把握しなければいけないと思っています。このような活動のネットワークを組んでいくことが本来の地域連携だと私は思っています。大学と博物館のつながりから、地域とのつながりへの広がりです。それで、大学と博物館だけでなく、まち全体が元気になっていくと思います。

もちろん大学としては、学生の教育、キャリアの一環としていくことも大切です。ただし、そのような活動によって、博物館も元気になるし、地域も元気になるということを最終目標にいただけると、非常に広がりがあり、学生も自分が本当に行きたいところに向かえるのではないかと思います。学生は、授業もあるし、宿題もしなくてはいけないし、卒業論文もあるし、アルバイトもしているし、遊びたいというのがあります。ですから、月にだいたい2日くらいしか参加出来ないかと思います。ただし、月に4日も5日も、週3日くらい参加している学生もいます。施設側から、週3日以上来られないと困りますよ、ということがあります。このような場合、施設側の意識の転換をしなくてはいけないと思います。

私も学生を商店街活性化ということで送り出しています。最初から商店街の人たちと意識がうまくあうとはかぎりません。ただし、学生の感受性だとか、可能性というのはものすごいものを持っています。そういうものを相互の試行錯誤のなかうまく引き出してあげるのもコーディネーターの能力だと思います。

田村 私は2003年に提案したプロジェクトのなかに、すでに授業のなかで博物館の学芸員に指導してもらって、展示案内のボランティアをするという、総合教育というものを提案しています。また、今おっしゃられたNPO的なものをつくっていくというのも提案しています。しかし、当時はそれが実現しませんでした。本学には文化財学科や歴史学科はありません。本学の学科のなかで、本当にそういう活動をしていくとしたら、どういう組織をこの大学につくっていったらいいかという提案をぜひ具体的にさせていただきたいと思います。

木下 もし出来るとしたら、筑紫女学園大学のなかに地域連携室のようなものを設けることでしょう。そして、制度化することでしょう。博物館との連携、商店街や地域との連携など、あるいは観光事業の発展とか、そういうことを活動の文言を入れておくわけです。これは博物館側のほうも同様です。やはりある程度、制度化される必要もあるかと思います。あとは、双方のコーディネーターの必要です。それは、要望を丁寧に集め、出来ること出来ないことを判断する役割です。

学校連携などでよく先生から言われるのは、連携事業が指導要領に載っていないということです。ですから、1行でもいいから載せてくださいと、そうしたらしなければいけないことになります。意識だけでは難しいところもあります。でも、意識を育てなければいけないと同時に、その制度も少しでもいいから育てていく必要があります。小さいところから制度化していくということをお願いしていくことだと思います。

なお、その制度化と同時に、今私がしているのは、博物館学の教科書の改訂です。博物館学の教科書には、連携事業について書いていません。法律のなかにも入ってきていません。「教育基本法」も変わり、「まちぐるみで教育をやる」という文言が入ってきていますので、その法律のなかにも入れてくださいという運動をしています。そして、今、全国大学博物館学講座協議会西日本部会編の博物館学の教科書（全国大学博物館学講座協議会西日本部会編 『新しい博物館学』芙蓉書房出版、2008年）のなかに、博物館の連携活動ということを書いています。

中川 もう一つお尋ねしたかったのは、ミュージアム・エデュケーションということです。本学は仏教を建学の精神に持つ大学です。そこで「命の教育」ということを考えたとき、何か博物館との企画が出来ないかとか考えています。

木下 特に私の得意とすることはプランニングの分野です。しかし、特別展示の企画に協力してくださいという要請は多くはありません。つまり、どういうことかといいますと、予算と権限を握ってしまうと、自分の企画にしたいという思いが人間は強いのです。そういう風習を少しずつどこかで突破していかなければいけないので、そのために展示のモニタリングだとか、展示をつくるプロセスにも市民参加ということをいっております。実際、学芸員は展示の計画を手放さない場合が多いです。その意識を崩していくのが、いわゆる未来のミュージアムなのかもしれません。展示をつくる際にも、企画の段階から小学生や大学生が入ってもいいと思います。企画から制作の段階まで、さまざまな立場の博物館を使う側の人が入ることが、いかに高い質を生むかということ、今、まちづくりの活動のなかで考えています。これからの日本というのは、そういったかたちで市民力を入れていくこと、活用していかないと自治体もおそらく成り立たないのではないかと思います。

時里 そろそろ、この会も終盤ですが、これまでの話をうけて大森幹之先生、いかがでしょうか。

大森 私の専門はインターネットで、文系では全然ないですけども、最近よく韓国の人とかと一緒に、インターネットを通じて動画像の交換などをしております。私が考えているのは、次

世代のインターネットの利用のようなものです。もしも何か機会があれば、博物館との連携に協力出来れば楽しいのかなと思います。

木下 そういうボランティアもあります。その地域にいなければボランティアが出来ないということではなくて、インターネットのホームページをつくるのだったら出来るということで、北海道にいる人がボランティアで東京の博物館のホームページをつくっている方もいらっしゃいます。ですから、いろいろなインターネットを通じた事業展開というのはあると思います。また、事業設計だとか、あとはやはり博物館にある資料をうまく産業に生かしていくとか、そういうこともあるのではないかなと思います。

時里 生涯学習課の原さん、櫻井さん、大学事務の立場からいかがですか。

原 私は入試課も兼ねています。こういうかたちで大学が博物館のすぐ近くあることをうまく利用出来たらと思います。実習やボランティアが出来るということ、入試の広報のアピールに使えるといいのではないかと思います。

櫻井 今日初めて他大学の事例や外部の方の生の声を聞きました。今後、私たちが出来ることのヒントを得たと思います。

時里 今日はいろいろなかたちで、いろんな側面から木下先生に課題を渡していただいたと思います。今後は、それに対してわれわれはどう応えていくか。どう向き合っていくかということだろうと思います。

今日はどうもありがとうございました。

(研究会：終了)

付記

本研究会開催にあたり、10月18日に学内の任意の教職員による、「博物館と大学の連携活動に関する意見交換会」を行なった。また、木下達文先生には、研究会同日、学生及び市民対象の公開講座「博物館と地域連携 — ミュージアムの未来像を求めて —」でお話をしていただいた。今回、木下達文先生、さらには多方面の方々に多大な御協力をいただきました。この場を借りて謹んで感謝の意を表したいと思います。

本研究会の活動は、生涯学習委員会の2007年度、地域連携事業推進費「公開講座の実施(後期)」、「委員会運営費」によるものです。

参加者の所属は、2007年当時のものです。

なお、本研究会の音声反訳はオフィス・ピースに依頼した。その後の整理・編集は、日本語・日本文学科の森田真也、九博連携準備委員会のメンバーが行なった。

(もりた しんや：日本語・日本文学科 准教授)